

# 巻 頭 言

## 共同作業と共同経営

最近農業の近代化と共に農業経営の合理化の推進が目覚ましく、共同経営の問題が各地を賑わしている。畜産の分野に於ても、酪農や養鶏部門でこの問題が採り上げられ、県内でも既に実施の段階に入ったところも少なくない様である。

然し共同経営になると人間的結合や、出資の問題、土地の問題等と共に中心的技術者、指導者のセンスの問題や、共同経営者の作業能力、提供した家畜の能力等の問題がからみ合っ、各種の型の経営が生まれて来ている現状である。このことは経営グループの置かれている立地条件やその地区の習慣性や経済力も大きく作用している結果であって、経営グループに最も適した型の経営方式が採用されていることは論を俟たない。

このような共同経営も勿論必要であるし、今後大いに研究しなければならないわけであるが、現段階に於ける1つの研究課題は矢張り共同作業にあると云うことも出来るのである。共同経営への第一段階として、先ず共同作業を実行し、その結果に於いて必要があれば、共同経営に踏み切ることも考えられるのである。然し乍ら本県の実状は未だ必ずしもこの段階に達しているとは云い難く、個人中心の考え方が先行していることは否めない。畜産の経営は次

第に複雑化し、畜産そのものが農業経営組織の主軸をなし、年間粗収入の半分以上を負担する様な様相を示して来ると最早個人的な経営は困難であって、共同体制を採用させざるを得ないのである。

昨年の畜産経営共進会に於けるグループ活動の実績は大きく評価され、今後の畜産経営の1つの指針となったが、これ等の成績をよく検討して、今後の畜産経営に大きく取り入れ、共同作業から更に発展して共同経営の線まで発展させ、儲かる畜産をやりたいたいものである。そのためにもう1度自分達の周囲を検討して、経営の合理化を図りたいものである。